がん検診について

がんは昭和56年から日本における死亡原因の第1位となっています。年間約97万人※ががんと診断され、約37万人※が命を落としています。ですが、診断と治療の進歩により、一部のがんでは早期発見・早期治療が可能となりつつあります。

※参考文献：国立がん研究センター　全国がん死亡データ（1958年～2018年）及び全国がん罹患データ（2016年～2017年）

■がんとは何か

がんは以下のような病気と考えられています。

1）誰でもなる可能性がある

現在、日本人は一生の内に2人に1人は何らかのがんになるというデータがあります。がんは、全ての人にとって身近な病気です。

2）予防できるけれど完全には防げない

がんは、禁煙や食生活の見直し、運動不足の解消などによって、「なりにくく（予防する）」ことが出来る病気です。しかし、それらを心がけていても、がんに「ならないようにする」ことはできません。

3）うつる病気ではない

がんは、遺伝子が傷つくことによって起こる病気です。がんという病気自体が人から人へ感染することはありません。一部のがんでは、ウイルス感染が背景にある場合がありますが、がんになるまでにはそれ以外にも様々な要因が、長い年月にわたって関係しています。

■がんを見つけるためには

がんを見つけるためには、検査をする必要があります。厚生労働省が推奨している検査ががん検診です。がん検診では「がんの疑いあり（要精検）」か「がんの疑いなし（精検不要）」を調べ、「要精検」の場合には精密検査を受けます。がん検診は「がんがある」「がんがない」ということが判明するまでの全ての過程を指しますのでがんの疑いのある場合は精密検査実施までががん検診です。現在行われているがん検診の中で、国（厚生労働省）が推奨しているがん検診が、以下のものになります。

種類	検査項目	対象者	受診間隔
①胃がん検診	問診に加え、胃部X線検査または胃内視鏡検査のいずれか	50歳以上※1	2年に1回※2
②子宮頸がん検診	問診、視診、子宮頸部の細胞診および内診	20歳以上	2年に1回
③肺がん検診	質問（問診）、胸部エックス線検査及び喀痰細胞診	40歳以上	年に1回
④乳がん検診	問診および乳房X線検査（マンモグラフィ）※視診、触診は推奨しない	40歳以上	2年に1回
⑤大腸がん検診	問診および便潜血検査	40歳以上	年に1回

※1：当分の間、胃部X線検査については40歳以上に実施可　　※2：当分の間、胃部X線検査については年1回の実施可

参考資料：厚生労働省　がん予防重点健康教育およびがん検診実施のための指針
(https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000176782.pdf)

■がん検診のメリット・デメリット

がん検診の受診にはメリットとデメリットがあります。

メリット

- がんが進行していない状態で「早期発見」「早期治療」できる可能性がある。
  進行しているがんは、治療が難しい場合が多いですが、進行する前のがんは治せる可能性が非常に高く、治療も軽くすむことで、身体的・経済的負担や時間は少なくすみます。
- 隠れていた他の病気が見つかることがある。
  がんになる前の病気も見つけることができ、治療に結び付けられます。
  がんになる前の病気とは、具体的にはポリープや潰瘍、異型上皮などです。こうした病変が軽い場合は経過を観察して、必要に応じて治療することで、がんになることを防ぐことができる場合があります。

デメリット

- がん検診でがんが 100%見つかるわけではない。
  検査の精度は 100%ではありません。ただし、初回の検診でがんと診断できなかった場合でも、毎回検診を受け続けることにより、がんを発見できる確率は高まります。
- がんの疑い（要精密検査）と判定されて精密検査を実施してもがんが発見されないことがある。
  精密検査が必要となるのは、がんの疑いを除外するためと、がんであることを確かめるための 2 つの意味があります。要精密検査とされた場合でも「がんではなかった」という結果を受け取ることがあります。
  結果が出るまでの間、受診者の方に心理的負担がかかりますが、早期発見・早期治療のためには必要なことです。

これらのメリット・デメリットを理解した上でがん検診を受診してください。

参考資料：公益財団法人　日本対がん協会「がん検診のメリット」https://www.jcancer.jp/about_cancer_and_checkup/

■コロナ禍でのがん検診について

新型コロナウイルスの感染拡大により、今までの生活様式が大きく変わってきています。高血圧や糖尿病の服薬がある人が受診を控えてしまい、服薬の中断で重症化するなどの健康被害が出ています。

●がんの早期発見の遅れ

新型コロナウイルスの感染拡大が長期化している昨今、がん検診が中断・延期されています。これらが延期されるとどういった影響があるのでしょうか。約7万人のデータを元に分析したアメリカの研究によれば、便潜血陽性者（要精密検査者）が次の検査を受けるまで 10 か月以上の期間が空くと大腸がんの場合、大腸がんのリスクとステージ（進行度）が上昇することが明らかになっています。※3
このことからも分かるように新型コロナウイルスの影響によるがん検診の遅れによって、がんの発見が遅れることが懸念されます。※3：Corley DA, et al. JAMA. 2017; 317:1631-41

コロナ禍においてもがん検診の重要性は変わりません。病院では、待合での距離の確保や検査機器の消毒など、感染対策を強化して安心して検査を行えるように環境を整えているところもあります。コロナ禍だからと、受診を控えずに適切な感染対策を行ったうえで、ご自身でがん検診の受診を考える必要があります。

がん対策推進企業アクション：「コロナ禍での職域がん対策について」https://www.gankenshin50.mhlw.go.jp/covid_19/index.html より引用

参考文献：国立がん研究センター 知っておきたいがんの基礎知識 (https://ganjoho.jp/public/dia_tre/knowledge/basic.html)
国立がん研究センター がん検診の都道府県別プロセス指標 (https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/process-indicator.html)
第 24 回がん検診のあり方に関する検討会（平成 30 年 5 月 24 日）資料 2
(https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000208393.pdf)